

解答

一
1 ちょじゅつ 2 ふるかぶ 3 こくそう 4 たし〔かめる〕 5 まず〔しい〕

二
1 土俵 2 防寒 3 候補 4 粉 5 厳〔しく〕

三
問一 1 イ 3 エ 10 エ 問二 ウ 問三 目
問四 ウ 問五 一匹の 問六 ア 問七 ウ 問八 ア
問九 ア 問十 イ 問十一 ウ 問十二 ウ・エ

四
問一 A ウ D ウ G ア 問二 エ 問三 ア
問四 イ 問五 c→b→d→a 問六 ア 問七 エ
問八 イ 問九 ウ 問十 エ 問十一 イ 問十二 ア 問十三 ア

五
1 番 2 乱 3 設 4 知 5 代

解説

三 出典は、南木佳士「ニジマスを釣る」。

人物関係は右図の通り。孫の真一と健二に魚のつかみ取りという体験をさせたいという語り手のはからいは不成功に終わった。文句を言いながらも、語り手の母は夫である語り手の父にそのことを告げず、優しい言葉をかけている。



問二 ア そろそろ歩く。＝静かにゆっくりと。イ ぐいぐい引っ張る。＝強い力で続けて。

ウ ずんずん進む。＝どンドン。物事が速く進行する様子。エ めきめきと腕を上げる。
＝目に見えて早く成長（上達）する様子。

問三 目を奪われる＝すっかり見とれる。

問四 母が「オニギリ一杯作って待ってた」と父に対して怒っている。それを聞いた澄子は、自分が怒られたわけでもないのに「すみません」と頭を下げている。ここからわかる澄子の心情を問われている。語り手の母がオニギリを作ったのは、自分の子供達のためなので、とりあえず自分が謝って、少しでも母の怒りを鎮めたかったのだと考えられる。ア＝父のしたことを、澄子が「身勝手」だと思っている様子はない。イ＝「父を弁護できずにいる自分を腹立たしく思いながらも」という様子はない。エ＝「気づかなかった」とあるが、澄子たちは初めて知らされたことであり、気づくことはできなかったので、謝ろうとは思わないはず。

問五 傍線部直前「ニジマス相手のつかみ取りに」より、「つかみ取りがうまくいかない」ということだと考えられる。このような内容に似ている部分を探す。

問六 傍線部直後の、母のせりふに着目。

問七 傍線部直前「あの爺さんの考えることはいつもそうなんだよ。思いつきばっかりでさ」より、父はいつも思いつきで行動してばかりなのだとわかる。＝ウ「気まぐれ」。

問八 ニジマスをつかみ取ることができないので、母の指示のもとザルで取るようになった。同じことを繰り返して、「淵の中での足踏みにも飽きてきた」という状況で、澄子は「これは魚取りじゃなくて、回収ね」と「舌を出した」。澄子は、このような方法でニジマスを取り続けることを「いやだなあ」と思っていると考えられる。イ＝論外。ウ＝「効率を優先」しているのではなく、他に方法がないのでこのような方法をとっている。エ＝「おかしみ」というより、「飽きてきた」という表現から、アの「いやげがさしている」の方がふさわしい。

問九 孫達にニジマスのつかみ取りを体験させたいという父の思いはかなわず、実際はザルですくって取った。思いつきであるとはいえ、父が孫への愛情から行ったことであるので、成功したということにしてやりたかったのだと考えられる。イ＝父がいないところでは、さんざん悪口を言っていたので、すでに「威厳」は失われている。

問十 父はみなに感謝されていると思い、嬉しくて泣いている。おとな婆さんも感動して泣いている。母はやりきれない様子で、澄子も困っている。力強い声で明るい提案をすることで、雰囲気を変えたのだと考えられる。

問十一 美しい光景に、健二は思わず「久しぶりに素直な言葉を口にした」。ここから健二は最近素直な言葉を言わなくなっていたのだとわかる。かっこうをつけたい年頃なのだろうか。兄が「硫黄沢の目覚めたね」と言う「頬を赤くし」ことから、兄が詩的でキザなことを言ったことで自分も兄のようなことを言っていたのだと気づき、自分が恥ずかしくなったのだと考えられる。

問十二 ウ＝「いつも」かどうかは不明。エ＝魚のつかみ取りの企画は、孫のことを思っていることなので「わがまま」とまでは言えない。

四 出典は、瀬戸賢一「日本語のレトリック」。

問一 A ア 目をぬすむ＝人に見つからないようにこっそりする。イ 目の上のこぶ＝（自分よりも地位・実力が上で）自分が活動するときに、邪魔になる人。ウ 目には目を（歯には歯を）＝害を加えられたら、それに見合うだけの仕返しをすることのたとえ。エ 目に物言わす＝目で気持ちを伝える。G ア 臍に落ちる＝納得する。イ 腹を据える＝覚悟を決める。ウ 腰を折る＝腰をかがめる。勢いをくじく。話などを途中でさまたげる。エ 肝に銘ずる＝忘れないようにしっかりと心に刻み込む

問二 前の「奪われたものは、取り返さなければなりません。～出るところに出て正々堂々と自分の言い分を述べる」と、後の「不当な訴えや無実の罪に対して、身を守るために自己弁護をする」は、対比になっているので、「あるいは」。

問四 ②段落から、「レトリック」の意味や目的が述べられている。問われているのは「西洋の」レトリックだが、①段落に「ふつうレトリックというとき、この西洋のレトリックを指します」とあるので、②段落からのレトリック一般の説明部分を答えとすればよい。読み進めていくと、④段落に「つまり、レトリックとは『説得術』を意味した」とある。

問五 つけられるものからつけていく。d→a・b→d=b→d→aとなる。c「だましのテクニック」→b「白を黒と言いくるめるようなレトリック」なので、c→b→d→a。

問六 ⑦段落最後「この弁論術の主軸が、説得術だったと考えていいでしょう」に着目。イ＝「正当な」が×。「主軸」と述べるにとどまり、「説得術以外は正当なものではない」とは述べていない。

問七 両刃の剣＝一方では大層役に立つが、他方では大害を与える危険を伴うもののたとえ。⑨段落では、レトリックは悪用されたり、政治レトリックにも応用されたりして、危険な面もある、と述べている。⑧段落までは「よく話す」「説得術」であると、役に立つ面を述べている。

問八 「もうひとつ大切な面」＝「表現そのものの魅力」。→②段落「飾り立てるばかりで、実質的な内容が乏しい」と批判されやすい→④段落「魅力的な表現を求めるレトリック」が力点をおいているところ＝美文や装飾ではなく、より適切な表現。つまり、表現そのものの魅力とは、適切な表現であることなので、大切なのだと考えられる。

問九 傍線部「このレトリック」＝⑩・⑪段落より「表現そのものの魅力」「修辞学」。⑫段落「現代＝中身さえ伝えればいいという風潮→ことばを飾り立てるばかりで、実質的な内容が乏しい」。

問十 レトリックとは、「説得術。広く言えば弁論術」(①～⑨段落)であり、「表現そのものの魅力。つまりは適切な表現」(⑩～⑮段落)であると述べている。アのE＝⑭段落より×。

問十一 ⑦段落「説得＝論証できない場合、一〇〇パーセントの確証がえられない場合に必要なもの」→⑧段落「説得がうまくゆけば、相手は納得する」→⑨段落「真実であっても、説得がうまくゆかなければ相手は納得しない」＝「真実でなくても説得がうまくいけば相手は納得する」。エ＝⑨段落「真実が真実であるということ、説得力をもって語らなければならない」より、「真実かどうかは問題ではない」が×。

問十二 ②段落「話し手・ことば・聞き手という三つの要素が絡む」→「どのような聞き手か」「話し手自身の評価はどうなのか」「そして、あれもこれもことばを媒介にして伝わる」。イ＝「ことばを媒介にして伝わる」と述べるにとどまり、「最も大きな影響をあたえる」とは述べていない。エ＝「三つの要素が絡む」と述べている。

問十三 イ＝Ⅲが×。ウ＝Ⅱ「問題点」が×。エ＝Ⅲが×。